

第18回ズーム三水会記録

日時：2022年12月21日（水）16時～18時

共同討論 テーマ：三水会について

参加者：13名

発言順 岡本好廣 村澤澄子 小寺隆三 富沢賢治 石塚秀雄 中村範子 今尾和美

斎藤嘉璋 大多和巖 丸山茂樹 岩垂 弘 （小関 栄）（紙上参加） 野口幹夫

概要：

岡本好廣氏：「三水会の発会から今日までを振り返る」最終ページに全文添付

村澤澄子氏：戦争時代を生き抜かれた父であり三水会会長を務められた村沢泉様の思い出を語られた。戦争時代のつらいトラウマを抱えながらも楽しさしかない生き方を示された。

村澤会長の喜寿の祝い記念写真と雑誌山水3巻を最終ページに添付

小寺隆三氏：小学校まで満州で過ごされ敗戦前後の恐ろしかったソ連侵攻の経験

富沢賢治氏：Zoom 三水会の1回目で労働者協同組合を今年1月には南アメリカのブエンビビールを紹介した。来年は社会連帯経済を語る予定だ。

三水会の今後のテーマとして「自分史を語る」を提案したい。

石塚秀雄氏：国連安保理の話をした。次の予定は決めていない。今尾様からラテンヨーロッパに関する話をしてほしいとの要望があった。

中村範子様：三水会は聞かせてもらって楽しい。生協連とオウエン協会で働き多くの知識人を知ることができた。

今尾和美氏:かつては会の後夕食会ができた。今後年 1 回は昼食会をやったらどうか。また会員に民間企業者特に女性会員が入れるといい。

斎藤嘉璋氏:これまで生協史と故郷の佐渡を語った。いま取り上げたいのは生協がかかわる戦争と平和 ウクライナの生協。PC が不安定なのが心配。

大多和巖様:三水会へは多くの人とのつながりで入った。様々なテーマで報告したが、来年はまだ検討中。

丸山茂樹氏: 5月にセネガルで開かれる GSEF の会を6月には報告したい。

岩垂 弘様:三水会は ZOOM の頃から第2次の三水会がスタートした。その前は民間企業の OB 中心 今は組合関係と学者中心。年間スケジュールはやめてタイムリーなテーマを取り上げるため、3 か月位の計画で進めたらどうか。

小関 栄氏(紙上参加) 代読野口幹夫 「三水会について(私の感想と回顧)」を最終頁に添付。

ビデオ記録: <https://youtu.be/hPkWVv-k2wM>

- 資料の添付
- ① 岡本好廣様の「三水会の発会から今日までを振り返る」
 - ② 村澤泉会長を偲ぶ
 - ③ 小関栄氏の「三水会について(私の感想と回顧)」

「三水会の発会から今日までを振り返る」

三水会は1979年4月に発会して43年を経過した。2022年12月の例会を機にこの間の経過を振り返ってみることにする。(岡本好廣)

会は偶然の出会いから始まった

この会はあることがきっかけで始まった。1978年箱根湯本であるコンサルタント団体が主催した「中期計画策定セミナー」に参加したところ、仮の企業を創業して5年間の中期計画を策定する作業が課せられた。チームの自己紹介の時に私は「生協と生協法」を説明した。私以外は大手株式会社の人たちであった。1チーム8人で2日間取り組み、3日目にできた計画を発表した。この時のチームメートが住友海上火災保険(株)企画課長前田僕介氏である。生協法には「組合員以外の利用を認めない員外利用禁止と地域制限の規定がある」ことを説明すると驚かれた。前田さんは私たちのチームは生協を対象にすることを提案し、全員が支持した。当時私は全国の生協の経営指導を担当していた。前田さんの経営企画と私の経営指導の仕事が中期計画策定にマッチしていてチームは最優秀賞に選ばれた。帰りのロマンスカーの中で、前田さんがこれを契機に「異業種交流研究会」を発足させませんかと言われた。他の企業の友人も誘うとのことであった。2週間程経って連絡があり、他社の企画部の人たちに話を持ち掛けたところ面白い、やろうということで次のような企画になったという。

- ・年間日程を決めて毎月1回夜に行い、少人数でも実施すること。
- ・テーマは自由で、「会則、会費、会長なし」の会にすること。
- ・研究発表と案内・会計を会員が分担して進めること。

大阪大学出身の前田さんは同期や後輩で在京の企業に勤務している人に呼びかけた。私も友人、知人を誘って参加することにした。毎月第3水曜日に開催するので<三水会>と名付け、1979年4月18日新宿西口の住友ビルで設立の集いをもった。この時集まったのは30人程だったと思う。金融、保険、商社、重工業、電機、化学、シンクタンク、マスコミ、大学等に所属する人たちであった。発足当時は中堅であった会員が年齢とともに幹部になり、役員になって現在に至っている。前田さんはその後大阪本社に戻られ、残念なことに発会后5年たたない時期に癌で亡くなられた。三水会発会に尽くされた前田さんの功績は大きい。その後阪大の仲間が努力され、京大、神戸大、九大と仲間を増やされたので、今でも会員は西日本の大学出身者が多い。負けていられないと東京のわれわれも会員を増やすことに努力を続けた。

昨年コロナで休会中に野口さんが「三水会 例会目録年表」を作成され、今回その改訂版を出された。三水会 43 年の記録である。年度毎に国際、国内の政治・経済・社会の動きが示されているので、どういう時代背景のもとにテーマが選ばれたのかが判る。これも野口幹夫さんの発案である。私はこの年表をもとに研究会が 42 年間に取上げたテーマを系統別に示し、併せて毎年 11 月に 1 年の締めくくりに行っている全員討論と視察、忘年会を含めて合計 496 回の概要の紹介を作成した。それを元に「例会目録にみる 43 年間の歩み」と題して特徴を一覧表にして『ロバート・オウエン協会年報 45 号』に掲載した。

例会目録にみる 43 年間の歩み—例会テーマの分類とそれぞれの特徴

	テーマ	数	%	テーマ別の内容と特徴
1	産業と科学	62	0.13	科学全般の専門的解説、国内外の産業実務等広範囲に及ぶ。
2	国際問題	60	0.12	先進国から途上国ミャンマー、ベネズエラ等広範囲に及ぶ。
3	人生観・教育	60	0.12	ここでの問題が後に実施した全員討論の素材を提供した。
4	政治・経済	60	0.12	外部講師の登場が多い。同上、後に討論で深め合った。
5	哲学・宗教	53	0.11	ベルグソンの系統的研究、グラムシ、ポランニーも対象に。
6	社会問題	53	0.11	政治・経済と重複するが、格差問題等を重点に検討した。
7	企業・経営	44	0.09	日本企業の問題点を分析し、改革の方向を示唆した。
8	歴史その他	41	0.08	縄文・弥生、大和と続く時代を「日本原記」として研究
9	文化・芸術	35	0.07	「村上春樹と多和田葉子の文学」等多岐に及んだ。
10	協同組合	26	0.05	農協、生協全国連の会員が 2 割程度おり、適宜報告した。
計		496	100	

毎年 11 月に 3 時間かけて実施する〈全員討論〉の最近 3 年間のテーマは次の通りである。

「今という時代について」

「世界経済と日本の立ち位置」

「日本社会が分断に陥る危険はないか」

忘年会はコロナで中止した以外は毎年会場を替えて実施してきた。2005 年日比谷シーボニア・メンバーズクラブで開催された忘年会には野口さんのご長男で宇宙飛行士の野口聡一さんが参加され、大いに飲まれ最後まで付き合われた。三水会のいい思い出である。

これまで三水会は忘年会の他、会員の叙勲祝や、古稀、喜寿、米寿等のお祝いもしてきた。

2012 年 4 月 15 日の三水会は共同通信社文化部の記者が取材に来て記事と写真を全国の新聞社に紹介した。それを多くの新聞社が記事にして報道した。埼玉新聞に掲載された当時の記事を紹介する。残念ながらこれを受けて三水会に続いて〈異業種交流研究会〉を組織した県はない。

知的刺激で人生豊かに

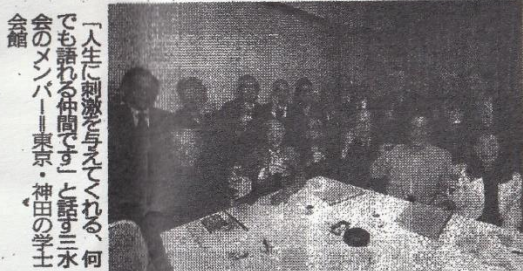
33年続く異業種勉強会 一人より集団が楽しい

33年続く異業種交流勉強会がある。東京で活動する「三水会」(村沢泉会長)だ。大手企業の役員などを務め終え、平均年齢が70歳代後半となった今も毎月1回、学習の成果を発表し、意見交換を重ねている。「三水会」は人生最大の楽しみ「1つ」と意欲的なメンバーに、学習とその喜びや会の運営について聞いた。

3月、東京・神田の学士会館の一室に、20人ほどが集まり、熱心に討論していた。この日のテーマは「原子力発電とエネルギー問題」。発表者は長年、原発に携わってきた会員だ。

発表者とテーマは12月

「原子力発電とエネルギー問題」をテーマに熱心な質疑が繰り広げられた。東京・神田の学士会館。



「人生に刺激を与えてくれる、何でも話れる仲間です」と話す三水会のメンバー。東京・神田の学士会館。

かになるように感じる」と会員の満足度は高い。

三水会は1979年、大手損保社員だった前田英介さん(80年に死去)が呼び掛け、会社員を中心に二十数人で結成。会の名称通り、毎月第3水曜日を開かれてきた。

介護や療養で退会する人がいると、会員の推薦で新メンバーを迎える。

「一人はつらいが、集団学習は楽しい」と話す伊藤公博さん(77)は多くの会員を勧誘した。「声を掛けたのは尊敬できる人です」と、入会基準を明かす。

「会員は、敗戦の焼け野原から復興した昭和の時代をともに過ごした。戦友のような存在」という。会員は、経験も多彩で、宇宙飛行士の野口聡一さんの父親や、よご号ハイジャック事件の乗客だったという人も。

80年代は、コンピュータの活用や「米国の通信事情」「中小企業金融の変遷と問題」など任事に役立つテーマが多かった。仕事を離れた現在は「心と脳」「モーツァルト」「ベルグソン」と、

人生や生き方などにも話題が広がる。

「一企業で過ごした狭い経験よりも、広く深い知見を与えてくれる」と「生涯学習」を楽しむ会員が多い。通算の発表回数数がトップクラスの野口幹夫さん(77)は「死を迎えるまで精神を磨き上げ、開花させることが、命を与えられたものの務めであり、喜びです」と話していた。

短 信

パンの料理本出版

料理研究家の上野万梨子さんが「パンを楽しむレシピブック」(アイスト・プレス・1050円)を出版した。

蒸し焼きサラダなど、パンにぴったりの総菜や、残ったパンを活用できる料理のレシピを掲載。手軽に作れるように、身近な材料を使い、調理時間も20分程度で完了するよう考えたという。パンのチェーン店「アンデルセン」では、特定のパンとセットで945円で販売している。

湯沢利勝さんの死生観とその実践

これまでの三水会には立派な方が居られた。今後もこういう方々が続くことを期待している。その1人が湯沢勝利さんである。湯沢さんは1923年生まれ、戦前派で、大正12年の関東大震災の1月前に生まれたそうである。東京帝国大学を卒業され、砲兵将校として動員されていたとのことである。戦後民間企業の富士フイルムに入社され、後に大ヒット製品の<写ルンです>の部署の責任者として脚光を浴びることになった。三水会では「写ルンですと電子カメラ」「How toの視点からの死生観」の2つの報告をされた。多くの人は「生とは何か」、「命とは」、「生命とは」、「死とは何か」「何故死ぬのか」「死後の世界は」と言ったWay? What?の視点で考えることが多いが、視点を変えて「どう生きるか」、「どう死ぬか」というHow toで見てみたいという問題提起である。学徒出陣によって最も厳しい軍隊に入れられて徹底的に鍛えられたが、偶然にも数名が残されることになって船沈没をまぬかれて助かった。富士フイルム時代には子会社の事務所で突然倒れたが、近くに脳の名医が居て助かった。その後くも膜下出血で眼が全く見えなくなった。それにも関わらずある時かつての部下ながら「湯沢さんはお元気ですね。私もそのお姿をみて元気にになりました。」と云われた。「そうか、それでは生き抜くことをやろうではないか」と考えられたという。どのような時にも前向きな方であった。三水会が会場がなくて困っていた時は社長を兼務されていた銀座にある子会社の会議室をお貸し戴いた。退任後は学士会館での例会に毎回出席戴いた。杖を突いて奥様が介添えされての出席である。奥様は2時間以上も廊下の椅子でお待ちになった。目が悪いので報告をその都度テープレコーダーで録音され、後で聴き直されるというのには頭が下がった。感謝の気持ちをお伝えしようと2015年10月お宅に近い日本料理店で昼食会を催した。大層喜んで戴き、35年間に及んだ三水会の思い出をお話願った。その後内臓の病気に罹られ2年後に亡くなられた。富士フイルムの次の専務の井上修さんも会員になられた。アメリカの子会社の社長をされた方で激しく展開されたコダックとの商戦について報告されるなど、経営最前線の興味あるお話を伺った。その後コダックは経営不振に陥って事業を停止、国内、国際市場とも富士フイルムの独壇場になったが、フイルム市場そのものに大変動が起きた。これも事業転換で乗り切り、映像・印刷関連、記録メディア、医療診断装置、医薬品へ事業分野を拡大された貴重なお話をお聴きすることができた。

大利貴彦さんの教えと受けたご恩

大利貴彦さんは九大を出られて日本長期信用銀行（長銀）へ入られた・前田さんとは仕事を通じての関係だと思うが、入会されたことを大変喜ばれた。大利さんも早く亡くなれたが、三水で

は9回も報告された。お仕事の大変さを考えると超人的なことである。

長銀の大口融資先に消費者金融の大手**プロミス**があった。長銀はプロミスの再建と融資保全のために大利さんを社長に送り込んだ。大利さんは期待に沿って再建に取り組み、いち早く実績を上げた。ところがその後肝心の長銀が倒産してしまった。大手銀行が次々に破綻した金融危機の時代である。プロミスは「金の切れ目が縁の切れ目」とうそぶき、大利さんの居場所はなくなった。ここで大利さんが選択したのはこれまでの仕事とは180度違うものである。それはかねて考えておられた「**世界の被圧迫民族の研究**」であった。その取り組みは本格的なものであり、その後50冊近くのレポートを執筆、編集された。実際にそれらの人々が暮らしているところへ足を運んで研究された。研究の成果を纏めるために印刷、製本の機械を買い整え、自宅の離れに設置された。実際にそれらを見せて戴いて圧倒された。こうして製作された文献は三水会会員にも贈呈されると同時に例会で報告された。

- ・「**アメリカンインディアンの戦い**」
- ・「**蝦夷の歴史（アイヌの被圧迫の経過）**」
- ・「**琉球の歴史**」
- ・「**ケルトとアイルランド**」
- ・「**チベットの歴史と仏教**」

プロミス時代には「**消費者金融の現状**」という報告もされているので、生来研究が好きな人だったのだったのだと思う。

個人的に私は大利さんに大層お世話になった。

印刷機と製本機を使わせて頂き、「**生前遺稿集**」なるものを作ろうと企てたのである。原稿を横浜のご自宅へ持参して横書きにした原稿を縦2段に組み直すことから作業を始めた。しかしうまく行かない上に時間が掛かりすぎて私の手に終えず、大利さんに全部やって頂くことになって大利さんの仕事の邪魔をした。大利さんは全部私がやりますと云われたのに救われたが、大変な迷惑をお掛けし、本当に申し訳ないことであった。こうして出来上がったのが『**想いを追って**』**一岡本好廣前遺稿集**で、A4版130頁の大利さんが発行続けられた文献と体裁、ページ数もよく似ている。500部発行して三水会会員のみなさんにも贈呈した。生前に遺稿集を作っておけば長生きすると云われる。そのせいか、当時75歳だった私が90歳の今も生きている。望外のことである。それを含めて大利さんは私にとってかけがいのない大事な人である。お亡くなりになって密葬が終わった後、ご自宅へ野口さん、伊藤公博さんと一緒に横浜のご自宅へ弔問に伺ったが、印刷・製本所は既に片付けられていた。

村澤会長のお人柄に魅せられる。

富士フイルムの最新技術を取りいれて作られた銀座の新工場「近代精版」の新工場の「青空と虹の環境を求めて」と名付けられた見学会は魅力的なものであった。三水会の報告は印刷業界のこの他、「超能力」「気の奥儀」に触れる」といった珍しいもので勉強になった。甥の本多新さんは宮崎大学、京都大学の研究者を経て、自治医科大学の教授になられ、「ゲノム」や「IPS」等の専門的な話を解りやすく説明して下さった。三水会では都合4回もご報告頂いた。

小寺さん、小関さん、ご苦労様でした。

お二人とも名古屋と掛川から新幹線でお通いになった。出席回数もずば抜けておられ、感謝の気持ちで一杯である。

岩垂さん本当に有難うございました。

先に触れたようにプレスセンターの日本記者クラブでの研究会は素晴らしいものでした。コロナが終焉したら是非記念の夕べを開きたいものである。

野口さんが居なければ何もできませんでした。

野口さんとは古からの人を含めて三水会を解散することを真剣に相談したことがある。コロナが長引いた時にも再度相談した。しかし野口さんの存続の意志は変わらず、ZOOMで継続されることを提案され、今まで案内と当時の操作など技術的な引き受けられてここまでやってこられた。野口さんが居られなければ何もできなかった。三水会存続のためには今後も願う他に方法がない。若い会員を増やすことで精一杯の力添えをしたいと思う。

三水会から学んだものはとても深く、大きい

三水会に出会わなかったら私はどうしていたか？時々考えることがある。心が狭くて、自己中心の価値観で生きてきた者にとって三水会は驚きの連続であり、広い世間を知った思いであった。つくづく思うのはわれわれが「少数派」であって、周りは「多数派」である。卑下することはないが、特殊性を強調する余り孤立してはならない。良くも悪くも「常識」が社会を律しており、そこから出ることの大切さを学んだ。三水会はそれらを学ぶ学校であった。会を企画した前田さんが「3か月に1度か、隔月でなく毎月やろう」と云ったわけが判った。毎月会うことが大事で、

会わなければ遠くなってしまいます。歳をとればますますそうである。**三水会を生活の一部に位置づけて毎月開催することが継続につながった。**研究報告のレベルが高く、聴かなければ損という内容であることも大きい。誰もが一気にこの領域に到達したのではなく、月に1度報告を聴き、年に1度報告することを楽しみに各自が研究を続けたことがこうした結果につながった。

コロナのために一昨年は例会が3回も休会に追い込まれた。41年間で始めてのことである。2021年の計画では1月20日に一橋大学名誉教授富沢賢治先生をゲストにお迎えして、最終国会で成立した「**労働者協同組合**」のお話をお聴きする予定であった。それが「**緊急事態宣言**」で延期になったが法律は成立し、公布された。そして富澤先生にも会員になって頂いた。「最後よければすべてよし」かも知れない。そして三水会も**500回を迎える**ことになった。このような目出たいことはないのではなかろうか？

村沢泉会長



村沢さん父娘と三水会



平成26年8月20日

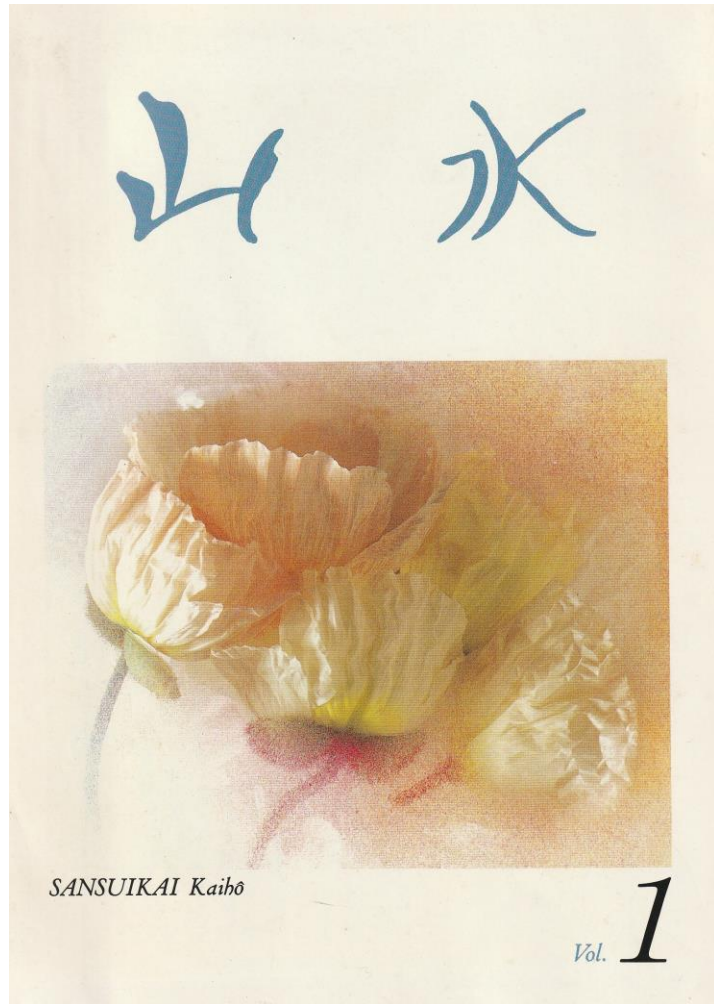
銀座 **Sun-mi** TEL.03-5568-3300

村沢泉様喜寿祝い

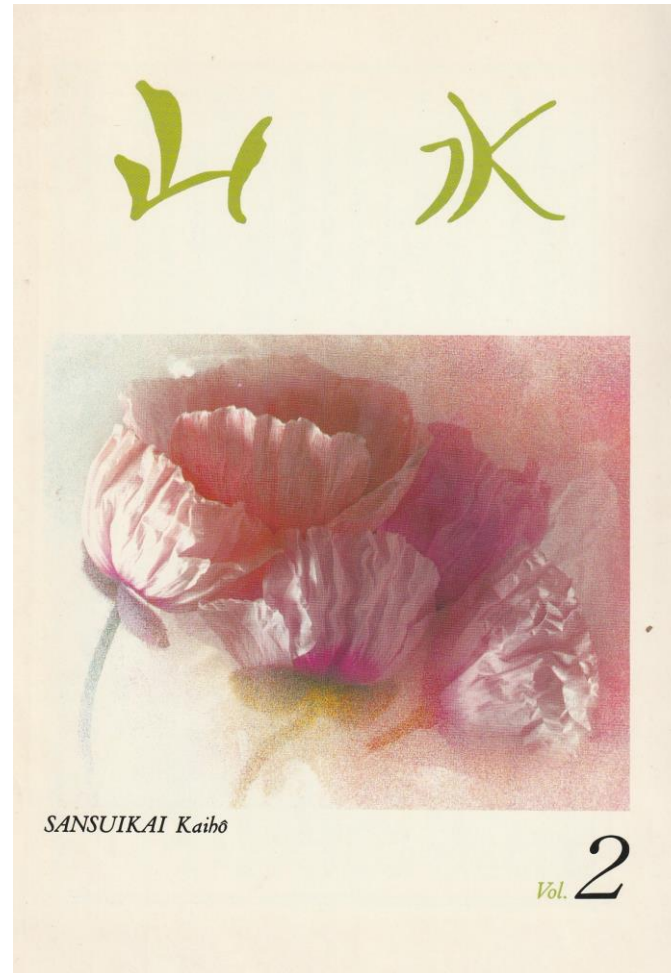




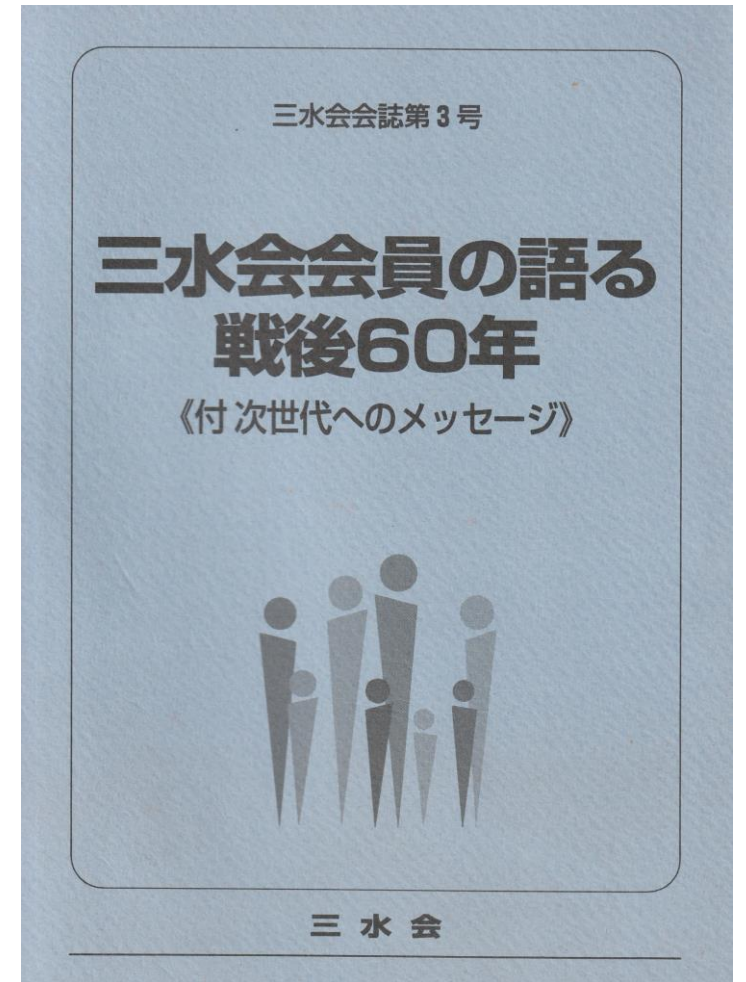
三水会会誌



1号 1990-4-18



2号 1997-12-6



3号 2005-12-14

三水会について

(私の感想と回顧)

2022.12.21

小関 栄

一、はじめに、三水会についての感想

当月の共同討議のテーマは「三水会について」です。小生は入会以来、丁度十五年になりますので、この間の感想について、先ず総括してみました。

三水会は開会頭書から、異業種交流研究会として発足しましたので、会員のほとんどがそれぞれ異業種の出身者ばかりの集まりであり、従って研究のテーマも各氏各様で政治や経済の時事問題ばかりか、国際状況、外交、歴史、医学、物理、産業、哲学、宇宙の話など、また文芸や音楽などからお茶、和歌、仏像彫刻に至るまで幅広い分野での問題が研究課題とされてきました。小生など殆ど無知の分野まで、実に幅広く多くが話題になりました。そのお蔭で学ぶ機会にも恵まれ、全く啓発されてきました。

また、会員の趣味も多彩で、意見交換すると実に驚くほどで、雑学研究会とは言え、担当者の発表の都度、衰え行く老人の脳を刺激して、若返りの活性剤・良いリスリングになってきました。将に、老いる程に益々その意義が大きく感じられてきました。

この会に永年にわたり推進力となっていた岡本・野口常任幹事、並びに参加会員諸兄に感謝申し上げる次第です。殊に昨年はコロナ感染拡大で暫く休会したものの、その後はズーム方式のオンラインに切り替えて三水会を復活させて戴き、今年も今日まで続けてきたことに、多謝報謝の極みです。

それから人と人との交流は、このような三水会は絶好の機会です。全く知らなかった人と交流できるのは何と素晴らしいと実感しています。お互い様ですが、人生最後半で勤務をリタイアすると、精々地域の人、隣近所の人、趣味同好会の友に付き合いが限られて極度に狭くなるのが常ですが、その点、三水会のメンバー間は、広い隔地でも、面と面との交流になり幅広い交流で貴重なことです。

昨年のはじめは、コロナ感染拡大の影響を受けて、年初早々の1月に予定の富沢賢治先生の「労働者協同組合法を学ぶ」が中止となり、漸く野口幹夫常任幹事のお計らいでオンラインでの研究会に切り替えられて7/21とから再会されました。三水会は当初から毎月ごとに欠かさず研究発表されてきたのに、このように1月から6月まで、長期にわたり休止となったのは初めてで昨年度は年間4件の報告になりました。でもその為、ズーム形式のオンラインで開催され、今年度は全件スムーズに進行しました。

この様にオンラインによる会合は、小生の様に東京から隔地に住む者でも、会場まで出かけて交流すると全く差はなく、自宅で普段着でリラックスしながらお話をし合うことが出来、手間と出掛ける費用(新幹線の交通費)が節約できると、全く喜んでいる次第です。

二、三水会への入会の経緯について

小生が三水会に入会したのは、三水会との関連があった人たちとの交流から始まりました。

正式に入会したのは2006(平成18)年の8月で、それ以来、今日まで満15年半を経過しました。三水会は

始まって43年というから会の歴史から見て、まだ3分の1の短い期間と日の浅い年限ではあるが、小生は、すでに齢は昨年に卒寿を越し、今年91歳の老境に入り、眼も耳も、思考力も衰えが目立ち、何時まで続くか不安ですが、気力で頑張っていきたいと思っています。

この際に、小生の入会時を回顧し、その経緯について説明します。

小生は2005年(平成17年)3月に一切の職(会社員、教員、公務員)を辞して、全く自由な身で横浜と掛川の二つの住居を往ったり来たりの二重生活をしていた。偶々知り合った農水省関連のNPOふるさと回帰センターの徳田智氏から、掛川にはそのセンターの推奨する団体があり、そこに藤本将氏(山水会員)という人が働いていると紹介された。それは学園花の村と称する所で、小生の掛川宅から約1キロ東にある農業団地内にあった。藤本氏の自宅は川崎市であるが、時々、ここの農業小屋に寝泊まりして仲間とともに働いていた。

註、学園花の村とは、報徳活動に熱心な古老の宮城正雄さん(静岡丹野報徳社社長)が日本のクラインガルテンと称した報徳文化村を作ろうと1995年に小田原の報徳博物館で宣言し、1998年に掛川市光陽の里の農業団地(11HR)のうち4~5HRを借用、”小さな農業をやろう”と会員を募って設立した団体である。(会員の多くは東京、神奈川、大阪などで当時は約80名)、さらに発足から10年後には、この光陽の里から北1.5キロ離れた倉馬の里の山林などを開墾した農地(3HR)を活用し、ここでも小さな農業を始め、一時は盛況を極めていた。しかし、開園後15年たち、会員の老齢化と退会で会員も減少して、遂に2017年に学園花の村は解散した。その時、倉馬の里は既に出来ていた”里山倶楽部倉馬の里”(会員は地元の人たちが殆ど)に、農場、および施設を引き継ぎ光陽の里の人たちも、これに合流した。そして今年10周年を迎え活発に活動している。

この学園花の村には伊藤公博氏(当時三水会幹事)も働いていて、訪ねると早速、藤本氏から紹介された。そして伊藤・藤本両氏から小生に学園花の村への参加を勧誘されて、この会員となった。また、この時に、水会の会合の話聞き、これへの会員として加入も勧められたのであった。

その後旬日を得ずして、今度はその三水会一行が、東京から学園花の村に見学来訪されることとなった。そして三水会一行は、花の村ばかりでなく、小生が顧問として働く公益社団法人大日本報徳社にも立ち寄り、そのほか掛川市内を案内した。その時に三水会幹部の岡本さん、野口さん、団野さんたちと話し合いながら、小生は伊藤公博氏を通じて三水会に正式に入会することとなったのである。

三、その後の三水会について、私の発表内容について

初めて三水会研究会合に出たのは、2006年の9/20の学士会館における326回の会合であった。この時の講師は、団野さんの紹介による城島由佳氏で、「日中ビジネスの現場から見た問題」であった。新聞紙上で見る情報とは異なった現場の生の声を聴いて、発表者のリアルな情報により、つくづく会の意義を痛感した。

それからの会合では「IT産業の諸問題」とか「日本の花き産業」、「インド社会の実体」「日本の

農業問題」などを聞くうちに、そのらのお話に深い関心を持った。最も印象に残ったのは当時野口さんのベルグソン哲学であって、長らく離れていた哲学について改めて勉強しなおすこととなり、小生の読書傾向が、再び学生時代に戻って学び直す機会となった。

その翌年(2007)の8月29～30日には、三水会で野口さんの提案で鎌倉市内をめぐって文学散歩をしようと提案されて、有志で鎌倉の”かみかわ”に宿泊して、ゆっくりと勉強会を行う機会があった。さらに、その夜の研究発表のテーマは”感銘を受けたこの本”と”私の死生観”であった。この時、小生は村上和雄著“生命の暗号①②”と私の死生観”について自説を始めて発表した。この夜は浴衣姿で始めてゆっくりと三水会の人たちと懇談し、議論風発によって小生は大変に啓発された。会員は殆ど同じ世代の人なのに、人によりいろんな人生観を持っていると印象付けられた。

それから小生が、三水会として発表したのは、そのまた翌年の2009年3月であり、日頃漢詩の勉強をしているので、この機会に中国漢詩人の李白と杜甫の生涯について纏め「漢詩の心を今に伝える詩人」として発表しました。漢詩を約20編ほど選び、その心を発表者が心酔するほど精緻に説明しましたが、従来とは異質の発表の精か、余り質問も少なく終わり、残念に感じました。

次の会は野口氏のベルグソン哲学に刺激された精か、報徳思想の根源となった二宮尊徳翁の「三才報徳金毛録」を、さらに「神儒仏正味一粒丸」と報徳思想に偏って発言してきました。しかし、その後は仮想通貨や財政問題、IT産業やAIの問題等に切り替えて、発表しました。

次表のとおり、この間の詳細を纏めて記しておきました。

発表年月日	発表のテーマ	場所
2009.3-18	詩心を今に伝える—李白と杜甫	学士会館
2010.3-17	報徳思想の原点「三才報徳金毛録」	〃
2011.6-15	儒教と報徳思想	〃
2012.9-17	「禅の心と氣と理」について	〃
2013.9-18	「禅の心と無」について	〃
2014.9-17	報徳思想を広めた人たち	〃
2015.9-16	「神儒仏正味一粒丸」について	〃
2016.3-18	報徳思想の今日性	〃
2017.9-19	金融革命なるか一、フィンテックとビットコイン	プレスセンター
2018.9-18	金融革命なるか二、フィンテックとビットコイン	〃
2019.9-18	「報徳思想の神髄」尊徳哲学から学ぶ	〃
2020.3-18	財政破綻を招く—MMT理論と赤字財政容認論	〃
2021.9-15	デジタル化と決済通貨の変化について	〃

2022. 9-18	AI 時代における人間性について	オンライン
2023. 2-18	(予定) 報徳思想の哲学的考察	//(予定)

以 上